

MEDISMA AI クラーク

開発協力医師スペシャルインタビュー

医療の質と経営を両立する AIクラークの進化とは



公式サイト



開発協力医師
スペシャルインタビュー

藤田医科大学 総合診療科
客員講師

草島 邦夫
KUNIO KUSAJIMA

医療の質と経営を両立するAIクラーク

医療DXが進む中、診療現場では「医師が診療に集中できない」という課題が続いています。本資料では、AIクラークの開発協力医師である草島邦夫先生に、生成AIが診療の質と経営にどのような変化をもたらしているのかを伺いました。

生成精度がもたらす、 “診療の再現性”

診療現場でAIクラークを使うなかで、印象的なのは「生成の質」が日々進化していることです。

初期の頃は、医師の意図を十分にくみ取れず、修正が必要な場面もありました。しかし現在は、医師の思考の流れや診察時のニュアンスまで、かなり正確に再現できるようになっています。

この「生成精度」の向上こそが、診療の質を支え、再現性を高める大きな要因になっていると感じます。

現行バージョン（V3）は、日常診療に耐えるレベルに到達しています。SOAP構成の安定性や医学用語変換の正確性が向上し、診療終了時点でカルテ記録の8～9割が仕上がっているため、後の手直しはほぼ不要となりました。

特に、患者の生活背景や家族状況を踏まえた情報が自然に記録されるため、総合診療に必要な患者中心・家族志向ケアが質高く実践できています。結果として患者満足度向上とともに、継続受診の促進、医業収益の改善にも役立っています。

診療現場を支える “再現性”の価値

AIクラークがもたらした変化は、単に記録を自動化することではありません。

診療の一貫性を保ち、誰が診ても同じ水準で説明し、提案できる——その「再現性」こそが、医療の質を下支えしています。

医師の経験や勘に依存していた部分を可視化し、思考の流れや説明の順序をAIが補助することで、若手医師の教育やチーム内での共有も格段にしやすくなりました。

また、診療報酬や文書作成など制度面の整合

性を保つうえでも、この“診療の再現性”が効果を発揮しています。

AIが医師の意図を正確に反映することで、カルテ内容や紹介状の品質が安定し、結果的に医療安全や経営効率の向上にもつながっているのです。

教育・チーム医療へ広がる “思考の共有”

AIクラークの導入によって、医師個人のノウハウが“チームの知”として共有されるようになりました。

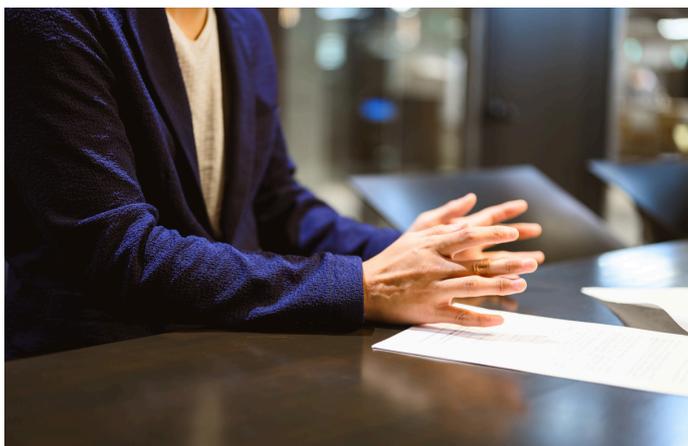
診療の一連の流れや説明の仕方がデータとして蓄積されることで、若手医師や多職種スタッフが「どのように説明すれば患者に伝わるのか」を学びやすくなっています。

また、生成された記録を振り返ることで、診療の質を客観的に評価することも可能になりました。

これまで属人的だった診療の“型”が共有され、チーム全体の診療レベルを底上げする仕組みとして機能しています。

AIクラークは、単に医師の負担を減らすツールではなく、

「医療をチームで支える文化」を育むための教育インフラへと進化しつつあるのです。



医療の質と経営を両立させる “現場発”の進化

現場での使われ方をもとにAIが改善を重ねることで、診療報酬や文書作成など経営に関わる領域でも効果が現れています。

たとえば、紹介状や報告書の生成品質が向上し、医師がチェックに要する時間が大幅に削減されました。

これにより、診療報酬上の加算取得や外部連携のスピードアップなど、“医療の質を維持しながら生産性を上げる”という成果が見られています。

さらに、AIクラークの生成データは教育や評価にも活用でき、若手医師の育成や院内の診療レベルの平準化にも寄与しています。

これまでブラックボックス化していた医師の判断プロセスが可視化され、

「なぜこの説明をしたのか」「どんな言葉を選んだのか」を後輩が学ぶ材料として蓄積されるのです。

こうした“現場の声から進化するAI”という構造こそが、医療の質と経営を両立させるカギになっています。

経営の好循環を生む “医療DXの現場進化”

AIクラークの導入によって、診療時間の短縮や記録作業の効率化だけでなく、医療機関の経営面にも確かな成果が表れ始めています。

特に大きいのは、“医師が診療そのものに集中できる時間が増えた”こと。

これにより、1日あたりの診療数や自費診療の提案機会が増加し、結果として医療の質を保ちながら収益構造を改善するという理想的な循環が生まれています。

また、AIクラークが生成する記録の精度が上がったことで、診療報酬上の算定漏れや文書の不備が減少しました。

カルテ内容と書類内容の整合性が保たれることで、監査リスクを下げながら「医療安全」と「経営安定」を両立する体制を実現しています。

さらに、事務やスタッフの負担も軽減され、「医師の働きやすさ＝組織全体のパフォーマンス向上」という持続可能な経営モデルへの転換が進んでいます。

AIクラークの進化は、単なる効率化ツールではなく、医療と経営の間にあった“分断”を橋渡しする仕組みとして機能しはじめているのです。

チーム全体で“診療の質”を 育てるAIへ

AIクラークは、単に医師一人ひとりの業務を支援するツールではなく、診療の質をチーム全体で高めるための共通基盤へと進化しています。

生成された記録や説明文は、医師の診療プロセスそのものを“見える化”する役割を果たし、若手医師やスタッフが「なぜこの説明をしたのか」「どのように患者へ伝えたのか」を学ぶ教材になります。



これは、これまで経験や感覚に頼っていた教育の現場に、“再現性のある学び”をもたらす大きな変化です。

また、AIクラークを介してチーム全体が同じ情報を共有することで、説明のばらつきが減り、スタッフ同士の連携やフォローがスムーズになりました。

患者への対応品質が安定し、結果として医療機関全体の信頼性向上にもつながっています。

教育・チーム医療・経営――

それぞれが別々の課題として存在していたものを、AIクラークがひとつの流れでつなげる。

「AIが人を支える医療」から「人がAIとともに育つ医療」へ。

その転換点に、今のAIクラークの姿があります。

医療を“人に戻す”AIのあり方

AIクラークの進化は、単に医療を効率化するものではありません。

人の想いを引き出し、患者と向き合う時間を取り戻すための仕組みです。

AIが人に近づくのではなく、人が本来の医療を取り戻す――

その未来を現場から共に形づくっていくことが、私たちの目指す姿です。